大岡昇平著

俘虜記

創元社

俘虜記
昭和二十三年十二月二十日初版發行
昭和二十四年一月二十日三版印刷
昭和二十四年一月三十日三版發行

定價 一四〇圓

著者 大岡昇平
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
發行者 矢部良策
裝幀 青山二郎
東京都新宿區戸代町二四
印刷者 松浦元
配給 日配（神田淡路町）

東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
（大阪市北區樋上町四五）
發行所 創元社
電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九
會員番號A一一九〇五一

萬一落丁亂丁がありましたら取替へます

本製 木鈴・刷 印社 想理

目次

俘虜記……3
サンホセ野戰病院……67
レイテの雨……93
西矢隊始末記……181

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

俘虜記

わがこゝろのよくてころさぬにはあらず

歌 昊 抄

私は昭和二十年一月二十五日ミンドロ島南方山中において米軍の俘虜となつた。

ミンドロ島はルソン島西南に位置するわが四國の半分ほどの大きさの島である。軍事施設として見るべきものなく、これを守るわが兵力は歩兵二ケ中隊、海岸線に沿つた六つの要地に名ばかりの警備駐屯を行ふのみである。

私の屬する中隊は昭和十九年八月以來、島の南部及西部の警備を擔當した。中隊本部は私を含む一ケ小隊と共に島の西南端サンホセにあり、他の二つの小隊はそれぞれ東南ブララカオ及び西北バルアンにあつた。サンホセ、バルアン間、つまりこの島の全長を蔽ふ約五十里の西海岸の全部が開け放たれ、ゲリラが自由に米潜水艦の補給を受けてゐた。しかし彼等は攻擊しては來なかつた。

昭和十九年十二月十五日米軍は艦船約六十隻をもつてサンホセに上陸した。我々は直ちに山に入り、南部丘陵地帶を横切つて、三日の後ブララカオ背後の高地で同地駐屯の小隊と連絡した。米軍はまだこの地に上つてゐなかつたが、彼等はサンホセの砲聲を聞いて、いち早く糧食、無線機と共にこゝに退避してゐたのである。糧食はなほ豐富であり、まもなく我々と合流した附近の水上機基地の海軍部隊、遭難船舶工兵、非戰鬪員を合せ總員約二百名、なほ三ケ月以上を支へ得る筈であつた。明けて一月二十四日米軍の襲擊を受けて四散する迄、我々は約四十日こゝに露營した。

米機は終日頭上にあつたが、米軍は直ちに追求しては來なかつた。「奴等は怠け者だからこんなとこまでやつて來やしないさ。そっちが來なけりやこっちだつて行かないや。そのうち戰爭も終るだらう」と我々の當分の宿舍となるべき小屋掛け作業を指揮しながら或る下士官がいつたが、これは我々の希望のかなり端的な表現であつた。即ち米軍がこの島をルソン島攻擊の中繼基地として選んだことが明白である以上、我々がこの山中にぢつとして居れば、戰は我々の上を通過して、こゝは最後まで所謂「忘れられた戰線」として殘る可能性があつたからである。我々の樣な孤立無援の小部隊の抱き得る唯一の希望である。

しかし不幸にして我々はやはり「行かない」わけにはいかなかつた。我々はやがてルソン島バタンガス所在の大隊本部から敵狀偵察の命を受け、度々十數名より成る斥候が組織され、十日或ひは一週間サンホセ附近の山中に潜伏して歸つた。或る時彼等は米哨兵に發見され射擊された。

まもなく一ケ小隊はサンホセを見晴らす高地に移動して分哨となり、毎日彼等が望遠鏡で見たる狀況を大隊本部に打電した。彼等は屢〻數十隻より成る船團がサンホセ沖を通過北上するのを見、大型爆擊機が多數新設飛行場から離陸するのを見た。かつて我々がボートを操つて魚を釣つた灣内には、米機外艇が引搔いた樣に白い水脈を引いて縱横に疾驅してゐた。

一月に入り大隊本部は百五十名から成る斬込隊の派遣を告げて來た。しかし彼等の到着豫定日には米軍が中部東海岸一帶に上陸して居り、彼等を乘せた舟艇は以來行方不明であつた。もつともこの斬込隊は我々の間ではあまり歡迎すべき客とは考へられてゐなかつた。何となれば彼等の到着はとりも直さず、我々の中からも若干の決死隊を出して嚮導とせねばならぬことを意味したからである。六十隻をもつて上陸した米軍に對する百五十名の斬込隊の成果について、我々は何の幻想も持つてゐなかつた。

しかし我々はその後も命令により幾度かブララカオに出張し、或ひは到着してゐるかも知れぬ

斬込隊を迎へに行つた。我々は無人の民家を荒し、たまたま家財を取りに來た不運な住民を拉致して歸つた。かうして我々は不本意ながらだんだん掃蕩される原因を作つて行つたのである。

かうした絶望的狀況にあつても、我々兵士は比較的呑氣であつた。我々は盡くその年初めて召集され、三ケ月の教育の後直ちにこゝへ送られた補充兵であり、經驗の缺除から事態の重大さがピンと來なかつたからである。しかしいくら正確に事態を認識したからといつて、いつ來るかわからぬ壓倒的に優勢な相手を毎日氣に病んでゐられるものでもない以上、かうした無智は我々にとつてむしろ一種天與の恩惠だつたといふことも出來ようか。我々は大部分私の樣な三十を越した中年の兵士であり、目前の事態から强ひて早急な結論を求めようとはしなかつた。

それにこの山中の生活は最初のうちはそんなに惡いものではなかつた。氣候は既に乾季に入つて雨も少なく、暑いのは日中、それも日向だけであるから、着のみ着のまゝの露營生活には丁度手頃な陽氣である。糧食も差當つて不自由なく、分隊毎に疎開分宿したから軍紀もおのづから緩んで、兵士を片苦しい軍隊の日常の作法から解放した。我々はキャンプにでも來た樣な氣持で谷川の水で飯を炊き、マニヤンと呼ばれる附近の山地人（これは海岸地方に住む一般比島人より色の黑い異人種で、戰爭に無關心である）と馴れて、赤布、アルミ貨等を與へて芋、バナナ、煙草

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

等を獲た。我々は時々は麓に下り、飼主を失つて彷徨する牛を射つてその肉を食べた。

しかし災厄は意外な方からやつて來た。マラリヤである。

ミンドロは比島群島中最も惡性のマラリヤの發生する島ださうである。しかし豫防藥をとつてゐたため、サンホセにゐる間は患者は二三名を越えなかつたが、山へ入る時衞生兵がキニーネを忘棄したため、やがて急速に蔓延し、一月二十四日米軍に襲擊された時、立つて戰ひ得る者三十人を出なかつた。最後の半月の間には大體一日三人づつ死んで行つた。

病人は靜かに死んだ。彼等の急激な意氣沮喪は著しく、その呑氣な日常と異樣な對照を示してゐた。

中隊長は毎朝各分隊の小屋を見舞つた。彼は小屋に充滿してゐる病人を眺め、默つて戸口に立ちつくした。

私の分隊長は米軍上陸直後まだ退路の開いてゐた間に、遮二無二北上してルソン島に渡らなかつたことにつき、中隊長の決意を非難する口吻を洩らした。彼によれば、こんな山の中にいつまでもまごまごしてゐるから、大隊本部から面倒な偵察の命令を受け、結局かうして病人が增えて動きがとれなくなつたのである。

下士官のエゴイズムである。しかしこの判斷にはルソン島を不落の安全地帶と見做す近視眼的前提が含まれてゐた。かつてノモンハンの戰鬪を見た中隊長が、比島派遣軍の運命についてかゝる樂觀的豫測を抱懷し得た筈はない。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であつたが、無口で陰氣で、三十歳より下には見えなかつた。彼がノモンハンで何をなし何を見たか、彼は一度も語らなかつたが、その眼その顏には現れてゐた。私は彼の體にその僚友の死臭を嗅ぐ樣にさへ思つた。

「警備隊は警備地區をもつてその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいつてゐたが、私は彼が通り一遍の訓示を行つてゐたとは思はない。

彼は我々の現在地を特に米軍から祕匿しようとはしなかつた。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を與へ放ち歸らしめた。彼の言動には常に一種の諦めがあり、彼の動作はいはゞ過度に緩慢であつて、時々齒の間から押し出す樣に弱く笑つた。犧牲者の笑ひである。

彼は幾分進んで死を求めた樣である。サンホセ駐屯中行つた討伐戰において、彼は常に先頭に立つて戰ひ、決して自分を遮蔽しなかつた。彼は自分では戰爭の要請を至上命令として自らに課することを許しながら、それを部下に課することについては自己の責任を感ぜずにはゐられない、

あの心の優しい指揮者の一人であつた。彼等は一般にたゞ自己の死によつてしか、その部下に對する要求を正當化する手段を持つてゐない。

山中で最後に米軍の襲撃を受けた時、彼は火點觀測のため單身前進し、迫擊砲の直擊彈を受けて最先に戰死した。恐らく本望だつたらう。

一種の共感から私はこの若い將校を祕かに愛してゐた。私もまた私なりに彼とはかなり違つた意味においてであつたけれど、自己の確實な死を見詰めて生きてゐたからである。

私は既に日本の勝利を信じてゐなかつた。私は祖國をこんな絶望的な戰に引ずりこんだ軍部を憎んでゐたが、私がこれまで彼等を阻止すべく何事も賭さなかつた以上、今更彼等によつて與へられた運命に抗議する權利はないと思はれた。一介の無力な市民と、一國の暴力を行使する組織とを對等に置くかうした考へ方に私は滑稽を感じたが、今無意味な死に驅り出されて行く自己の愚劣を嗤はないためにも、さう考へる必要があつたのである。

しかし夜、關門海峽に投錨した輸送船の甲板から、下の方を動いて行く玩具の樣な連絡船の赤や青の灯を見て、奴隷の樣に死に向つて積み出されて行く自分の慘めさが肚にこたへた。

出征する日まで私は「祖國と運命を共にするまで」といふ觀念に安住し、時局便乘の虛言者も

空しく談ずる敗戰主義者も一紮げに嗤つてゐたが、いざ輸送船に乘つてしまふと、單なる「死」がどつかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。

私の三十五年の生涯は滿足すべきものではなく、別れを告げる人はあり、別れは實際辛かつたが、それは現に私が輸送船上にゐるといふ事實によつて、確實に過ぎ去つた。未來には死があるばかりであるが、我々がそれについて表象し得るものは完全なる虛無であり、そこに移るのも、今私が否應なく輸送船に乘せられたと同じ推移をもつてすることが出來るならば、私に何の思ひ患ふことがあらう。私は繰り返しかう自分にいひ聞かせた。しかし死の觀念は絕えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。私は遂にいかにも死とは何者でもない、たゞ確實な死を控へて今私が生きてゐる、それが問題なのだといふことを了解した。

死の觀念はしかし快い觀念である。比島の原色の朝燒夕燒、椰子と火焰樹は私を狂喜させた。到る處死の影を見ながら、私はこの植物が動物を壓倒してゐる熱帶の風物を眼で貪つた。私は死の前にかうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。山へ入つてからの自然には椰子はなく、低地の繁茂に高原性な秩序が取つて替つたが、それも私にはますます美しく思はれた。かうして自然の懷で絕えず增大して行く快感は、私の最後の時が近づいた確實なしるしであると思はれた。

しかしいよいよ退路が遮斷され、周圍で僚友が次々に死んで行くのを見るにつれ、不思議な變化が私の中で起つた。私は突然私の生還の可能性を信じた。九分九厘確實な死は突然推しのけられ、一脈の空想的な可能性を描いて、それを追求する氣になつた。少なくともそのために萬全をつくさないのは無意味と思はれた。

明らかにこれは周圍に濃くなつて來た死の影に對する私の肉體の反作用であつた。かうした異常な狀態にあつて、肉體が我々をして行はしめるものは頗る現實的であるが、その考へさすものは常に荒唐無稽である。

私には一人の仲間があつた。それはSといふ或る漁業會社の重役の息子で、私と同年の、妻子のある男だつたが、彼は銃後の資本家のエゴイスムに愛想をつかし（と彼はいつてゐた）その手先たらんよりは前線に出て一兵卒として戰ふことを夢みた。彼は內地で教育中前線出動の可能性をわざと軍に影響を持つ父親に知らさず、自ら內地に殘る手段を絶ち切つてゐた。彼の夢は前線の狀況を見て破れた。彼はわが軍が愚劣に戰つてゐると判斷し、「こんな戰場で死んぢやつまらない」と思つたといふ。

この言葉は私にとつて一種の天啓であつた。この死を無理に自ら選んだ死とする倨傲が、一種

の自己欺瞞にすぎないことに私は突然思ひ當つた。こんな邊鄙な山中でなすところなく愚劣な作戰の犧牲になつて死ぬのは、單に「つまらない」、たゞそれだけなのである。

我々は二人で比島脱出の計畫を立てた。その計畫とはかうである――いづれ我々が米軍によつて現在地を逐はれるのは確實として、何とか敵中を潛つて西海岸に出る。そして住民の帆船を分捕り、季節風を利して島傳ひにボルネオに遁れる（この際私が海水浴場で覺えた帆走術が役立つ筈であつた）。私はボルネオも安全とはいへないから、いつそ南支那海を突切つて佛印に渡つてはどうかと提案したが、Sはそれは食糧と航海技術の關係で不可能だから、次善を選ぶほかはあるまいといつた。

帆船が得られなかつた場合、我々は再び山に籠り、草の根でも食べて休戰を待つのである。我我は子供の時讀んだ「ロビンソン・クルーソー」の細目を語り合ひ、土民から竹から火を起す方法を學んでおいた。

この計畫はいかにも空想的なものであるが、我々はその實現の可能性を少しも疑はなかつた。

我々は繰り返しこの計畫を檢討し、日に三人誰かが死んで行く中で、墓掘人足の樣に快活だつた。（我々は實際墓穴を掘つた）我々はまた當時我々の最も身近な敵、マラリアに罹つた場合を考

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.